

連載 情報システムの本質に迫る

第114回 アーティストは世界をどう見ているか

芳賀 正憲

情報システム学会では、世の中の仕組みを情報システムとして考察しています。では、アーティストは世界をどのように見ているのでしょうか。

もちろん一人ひとり、ちがいがあられるでしょう。ここでは、毎年見知らぬ土地に長期滞在し、そこで生活しながら絵を描き続けている、1983年生まれの新進画家、幸田千依氏の創作プロセスに注目したいと思います。幸田氏は学生時代からプールを題材にして、目には見えない社会の実相を描き出そうとしています。

倉敷の大原美術館では毎年、倉敷に長期滞在し、(大原美術館の礎を築いた)児島虎次郎の旧アトリエで大作を完成させ、美術館で公開する、若手作家支援プログラムを実施しています。幸田氏は、2015年、招聘作家に選ばれました。

BS11「アーサー・ビナード日本人探訪」の中で、米国生まれの詩人ビナード氏が、倉敷で制作中の幸田氏を訪ね、さらに幸田氏が以前滞在していた横浜市寿町を幸田氏と訪れた記録が、昨年放映されました。現在も、**youtube**で見ることができます。

<https://www.youtube.com/watch?v=hzUrJrByxw>

倉敷で幸田氏が制作した作品では、縦4枚(2.9m)、横5枚(4.6m)、20枚に広がる絵に、プールの中の群像が描かれています。

BS11の番組で、幸田氏は次のように語っています。

幸田氏「一番最初のイメージは、あの3枚です。最初は全体の流れみたいなのを考えて」
ビナード氏「人じゃないんだ。描いているのは波なんだ。波っていうか、渦」

幸田氏「これがもし、すごく遠くから見る視点だとしたら、近寄っていったら、そこに一人ひとりの人間がいる。一人の人間から引いていくと、人というより流れになっていく。目の前のこともちゃんと見たいし、遠くからもちゃんと見られるように、1枚の大きな絵じゃなくて、分ける必要があった」

ナレーション「ズームイン、ズームアウト。それを敢えて油絵でやる。縦4枚、横5枚、20枚の絵を合せて1つの作品に仕上げようとしている」

ズームイン／ズームアウト、これには感嘆しました。ズームイン／ズームアウトは、情報システム学にとって、カプセル化、本質化／現実化と並んで重要な再起概念になると考えられます。従来情報システム関係者は、ズームインには力がいりますが、ズームアウトに消極的で、解像度も低くなる傾向がありました。

つづいて幸田氏は、横の壁面に貼り付けられたK J法風の紙片を指さしながら、
幸田氏「(アトリエに) 一人ですっというので、たまっていく言葉は壁に“一人ツイッター”
。誰にも発信しない。あとで見たときに、だんだんまとまってくる」

ビナード氏(紙片を読み上げて)「とんでもなく、まわりくどい方法で描く。これ宣言？」

幸田氏「そう。この絵のことですね。1枚取り出して、目の前のことだけ考えて描くけど、もどすとまた全体のことを考えるってなったときに、描いた絵のせいで隣の絵を変えなきゃいけない。それでまた隣の絵を描くと、今度は前に描いた絵も変えなきゃいけない。どうしてもそのズレを埋めていくために、何回も往復する視点がまわりくどい」

幸田氏「何で全部をいい感じに統一するかっていうと、やっぱり光だと思ったんですね。中心に光が集まっている部分がある。そこから、この絵はこの場所にあるから、これくらい光が来る。それを頼りにしている」

幸田氏「一人ひとりバラバラにいるようで、大きく見ると何か大きな流れがあって、そこに向かってしまっている。それは今の時代にしてもそうだし」

幸田氏「こういうことだって知った上で、一人ひとりどうするか、自分たちで決めるしかない」

ナレーション「絵の描き方で世の中と関わり合う。描きながら、社会の実像を見定めようとしている」

幸田氏「もうかれこれ10年くらいプールを描いている。けどそのプールをどこから見るか。上から見る場合もあるし、自分が水にはいつている視点もある」

ナレーション「幸田さんは、いろんな土地(別府、前橋、台北、新潟・妻有、・・・)で自分の視点を確かめてきた。1か所にちぢこまっていたら、ものごとは見えてこない」

幸田氏「一番ものがよく見えるのは、行きと帰りの道なんです。稲が人間みたいに見える。いろんなものがそのままあって、それをすごく肯定的な気持ちで見る瞬間があって、現実世界でももの見え方が変わっているって実感できたときに、一番今はうれしい」

ナレーション「ものごとがほんとうに見えてきた、その瞬間の喜びは、絵描きだけのものではない」

幸田氏「しゃべったり説明したりしなくても、きっと伝わるだろうなって信じられる」「自分にそういう体験があるから信じられるのかもしれない」

幸田氏は、2010年と2011年、横浜の寿町にいました。この町以外に生活の場を失った6500人の人たちが、簡易宿泊所に暮らしています。85%の人が生活保護を受けていて、70%が60歳以上、ほとんど一人暮らしです。

この町の人たちにアーティストとして何ができるのか、問題意識をもって町にはいったグループの中に幸田氏がいました。

実際に寿町にはいつて、昼間から酒に頼らざるを得ない人たちを見て、
幸田氏「アートとか言っている場合じゃないんじゃないかと思ったけど、やっぱり自分た

ちの表現、自分たちの方法でなにかやろうってなったから、最後にイベントをやった。小さな絵が横に10枚くらいつながっている。そのどこか好きなところを取ってもらう。隣同士の絵が、ちがうおじさんのちがうドヤに行く」

翌年の秋、幸田氏は、今度は一人で50日間ドヤに住み、絵を描きました。

幸田氏「寂しくなったら外に出て、ちょっとおじさんと話すとかそういう生活だった。しんちゃんに、そのとき会った。あるとき、この人のドヤに自分の絵をあげたいと思った」
幸田氏は、しんちゃんのために絵を描き、渡します。

4年後、ビナード氏とともにしんちゃんを訪ねたとき、絵は大事にしんちゃんのドヤに飾られ、しんちゃんは、いつもこの絵を見ていて、朝起きると「おはよう、千依」と心の中で声をかけているとのことでした。

幸田氏は、寿町でもプールの絵を描いています。

幸田氏「人物と私との間に起ったことが面白いと思っていて、それはこの絵の水面でいう、ここの間のこと。人間が動くから波が立つ。それが波として見えるし伝わってくる。大きく言えば社会全部であるし、政治も経済も何でこんなことがってことがたくさん起きているけれども、全部それは一人ひとり、個人と個人の人間がやっていることだ。だから私は、この絵をプールですって言い張っている」

幸田氏「セザンヌの絵は、風景と人の融合です。同じ光の下で区別なく、人間ということと自然ということと。でもあれも個々の人間にスポットライトは全然当たっていない」

ナレーション「セザンヌは19世紀を生きた。幸田さんは21世紀を生きている」

ビナード氏「ほとんど生態系を失った中に、多くの日本人とか多くのアメリカ人が、もう生活しちゃってるんだよね」

幸田氏「寿町はまさにそうだと思った。人の中に生きていくしかない」

ビナード氏「プールだよな」

ナレーション「自分が生きている現代を感じ取る。だからプールなんだ」

幸田氏「寿町がいいところだとか、天国だとは全然思えないし、思わないんだけど、自分の中で〇（まる）にしたい気持ちがあって。絵ではそれができたかな」「これも〇かという、新しい〇が増えていくショックがある」「しんちゃんも〇！」

ナレーション「人間の間で人間が泳ぎつづけるこの社会を、絵を描いて解き明かそうとする。自分もこの世を泳ぐ一人。幸田千依さんはそういう日本人だ」

2016年5月～9月、幸田氏は、不知火海を望む熊本県津奈木町に滞在して、地元の人たちと密接に交流しながら、絵を描いてきました。その様子が、幸田氏のブログに生き活きと記されています（作品展示は、つなぎ美術館で9月17日～11月27日）。

海岸で大作に取り組んだ、帰り道のことを記したブログです。

「わたしは海からの帰り道 たくさんのことを想っていたけど
海での時間でひしひしと想っていた一番大きいことはたぶん
人と人は 交差する そのとき 信号 (シグナル) を交換する ということ
帰り道 自転車で2秒ぐらいうれ違い こんばんわといつも挨拶する誰かとも
海でだけ会って 会話もほとんどしないけど 同じ夕日の中にいた斎藤さんとも
何考えているか 新しすぎてほんとうはよくわからない 20歳くらい年の違う小学生とも
私が描いている海の上に船でふかぶか一人浮かんでいるつるのさんとも
会話や共同作業がなくとも 一瞬でも20年の付き合いでも
その交差する瞬間に もう十分ななにかが起きている」

10月18日～19日、幸田氏は津奈木中学校で美術の出前授業をしました。

幸田氏は、自分が絵を描くことで、どのような力を身につけていったか振り返り、「ものを見る」という力と、それに費やす時間、それが筋力や国語の勉強の能力などと同じように、生きていく上でとても大事で、「ものを見る」力によってタフに生きていける、その可能性、それをみんなと一緒に経験できる時間にしようと考えました。

これは中等教育において (実は大学教育でも)、基本とすべき非常に重要な考え方です。

浦先生は、世の中の仕組みを情報システムとして考察するように言われました。しかし、情報システム関係者が、世の中の仕組みと、その本質を迫りしてきた参照領域の数々を、どれだけ十分に今まで「見て」きたのか、反省すべき点があります。

津奈木中学校での美術授業は、次のように行われました。テーマは「みんなの点が山に成る」です。

まず、山を見ると、山が木の集まりであり、木の集まりは葉っぱの集まりであり、葉っぱの集まりは形と色の集まりであることを黒板に図解し、「ものを見ること」について話します。次に一人ひとり画用紙に、「緑の丸を6個」など、自分できれいな、よいなと思う色、形、大きさを楽しみながら描いていきます。でき上がった人から、壁の決められた位置に貼っていきます。

1クラスで山の一部ができますが、クラスが進むにつれて、大きな山に成っていきます。全学年120名の絵をすべて貼り終えて、壮大な山の絵の完成です。1枚1枚寄ってみてもよいし、遠くから見てもよい、ズームイン、ズームアウトを繰り返すと、その度に心が動きます。

哲学者の今道友信先生は、情報システム学会における講演で、人間の情報行動が **information** (概念化) ⇒ **incarnation** (具体化) のサイクルになると話されました。P D C A の、情報の観点からの再定義です。

幸田氏は、アルバイトで学生時代からプールの監視員を続けており、プールをよく見て **information** をしっかり得ていました。また、日本各地、台北、横浜寿町にも長期滞在して人間社会の多様な実相についても **information** を得てきています。2つの **information** を結合し、プールを社会のメタファとしたのは幸田氏のアーティストとしての独創であり、以来幸田氏はプールを絵に **incarnation** し続けています。

世の中の仕組みと、その本質を迫ってきた参照領域の数々をよく見て、深層学習し、再起概念を発見、体系化していくことが、今後情報システム学会が推進していくべき最も重要な課題です。

この連載では、情報と情報システムの本質に関わるトピックを取り上げていきます。皆様からも、ご意見を頂ければ幸いです。